



教卓

教師との
の上で

!!

OHTORI SEIRA

鳳 青良



教卓の上で教師と!?

鳳 青良

© 鳳 青良 / 秋水社 ORIGINAL



教卓

教師の上で

!!?

OHTORI SEIRA

鳳 青良

ひとつの細胞を分かちあって生まれた

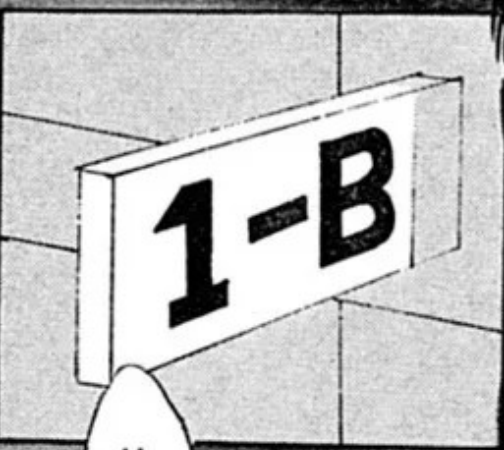
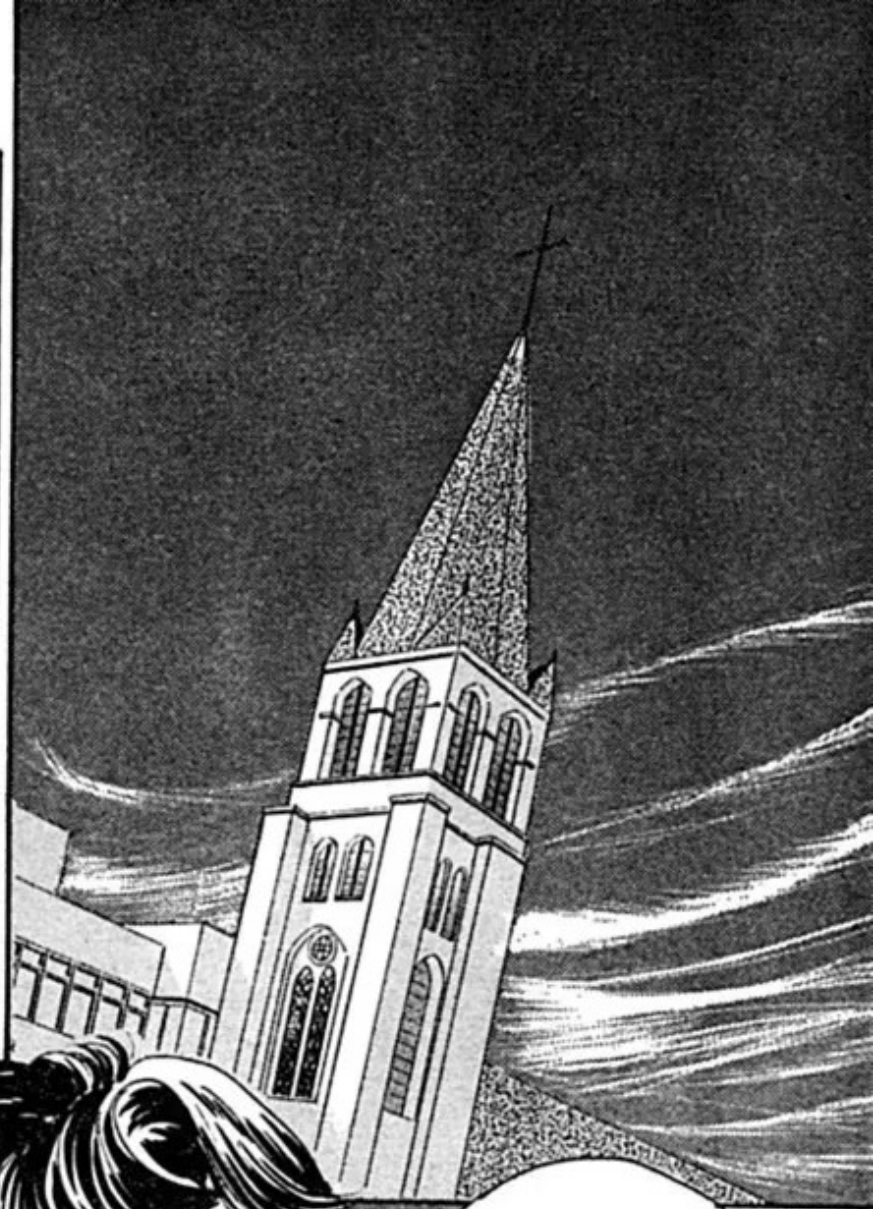
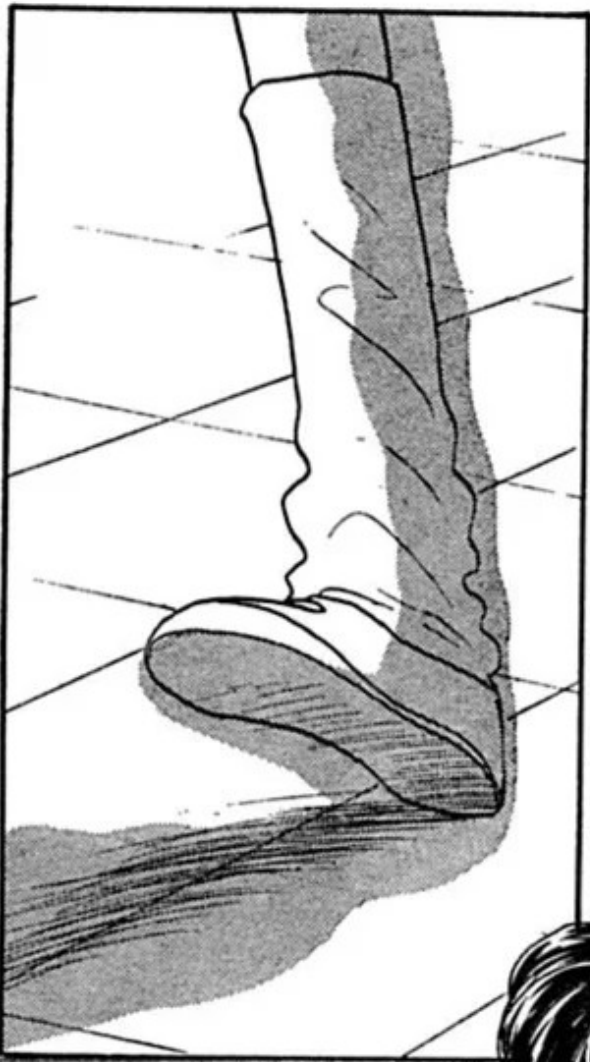
ふたつの生命

実華と結華



神様
神様

どうか ふたりに偏ることなく 幸せを賜りますように



委員会
遅くなっちゃった
結華
待ってるのに

結華...

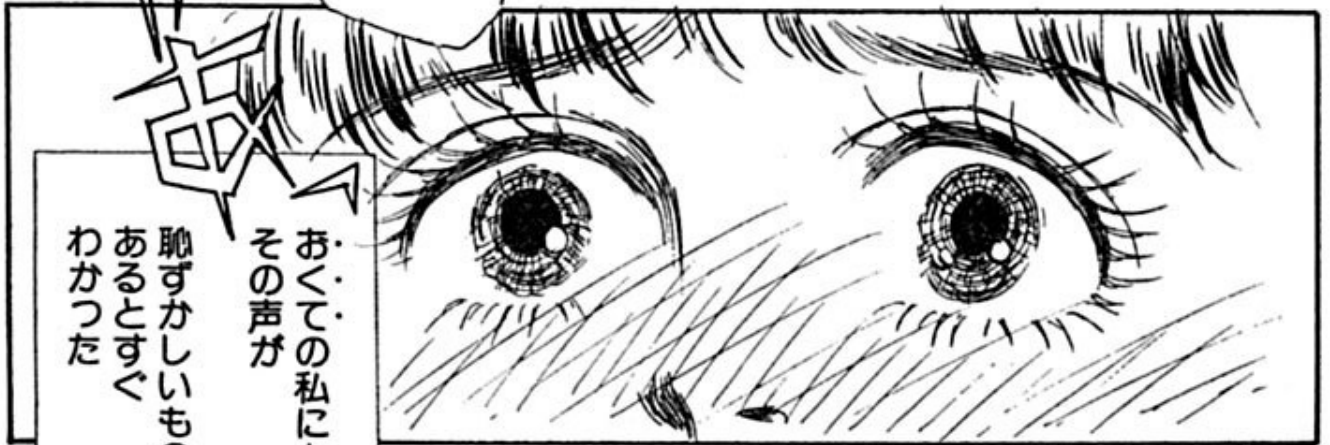


結華の声!?

あ…
先生

ん…
んん…

あ…
は…ん



あ…
おくての私にも
その声が
聴ずかしいもので
あるとすく
わかった



ああ…
先生…っ

わたしの
双子の片われの
||





あれは
ティープキス
っていうの？

顔
ナナメに重なってる

あ口
動かしている
唇重ねながら

すごい
すごい

なんだか
味わってるみたい
相手のこと

あ

ダメだよ
結華
こんなキスしたら
もう我慢
できなくなる

息も絶え絶えの
先生の声

我慢なんて
しないで先生

好きなの

甘ったるい
結華の涙声





お願い…

荒々しい吐息で
先生の声は
消え入りそうだった

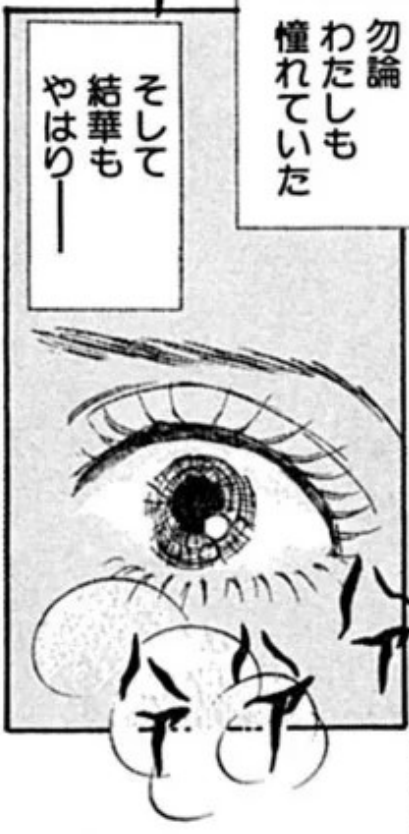


わたしを女にして

本当の恋を
教えて



結華…



そして
結華も
やはり—

勿論
わたしも
憧れていた



英語の園田^{そのだ}先生は
新任の若い教師で
ポストン大学に
留学経験があり
女子生徒に
圧倒的な人気が
あつた



嬉しそうに
甘い声をあげる
結華

あ...ん



結華の
白いおっぱいを
くるむように
揉み始めた



白い
チヨークを黒板に
走らせる
憧れの手が



わたしも
声を
あげそうに
なった

あ



あ...
先生...

自分が
揉まれてるように
乳首が堅く尖る



あ



あ...



あ…いや
先生
そんなところ
恥ずかしい

どうして？
嫌なの



ああ
おいしいよ
結華



あれが
クニニ
リンクヌ…？
あんなこと
するの…？



ビ
タ
ー

あ
気持ちいい

もう太股まで
くつちより
濡れていた



ああっ
感じるっ



壊れそうな
あえぎ声に
誘われて

や
いじめないで
先生

ああ…ん

早熟だな
結華は
もう
蜜が溢れてる



先生は結華を刺した

カッ
カッ
カッ

こっ
こっ
こっ

教卓の上で

わ・た・し・た・ち・は
ロ・ス・ト・バ・ー・ジ・ン・の
儀・式・を・済・ま・せ・た





言ったら
先生
わたしを抱いて
くれた？

初めて
だったのか
結華

言ってくれれば
よかったのに



.....

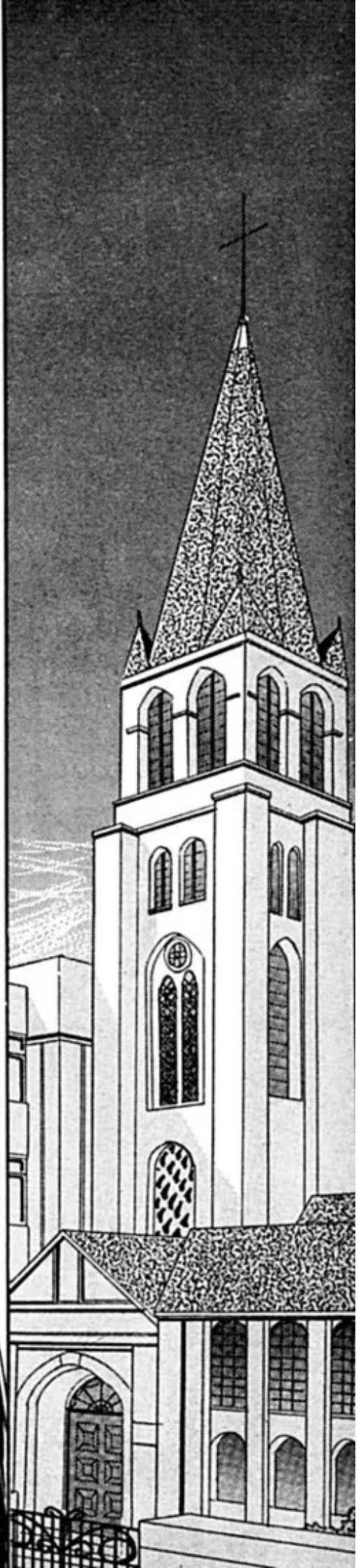


あーあ

ソックス
片っぽ
脱げちゃってる



先生が
す・ご・く
するから





はかせて



男と女の
愛し合い方

もっと
いろんなことを
教えてね
先生



はかせて
先生



最後に
長いキスをして
先生は静かに
教室を去った



うんと
丁寧に
教えてやるよ



そこに
いるんでしょ
実華



気持ち
よかったですよ?



結華…



帰りましょう



ごめんね
待たせて

キユツ

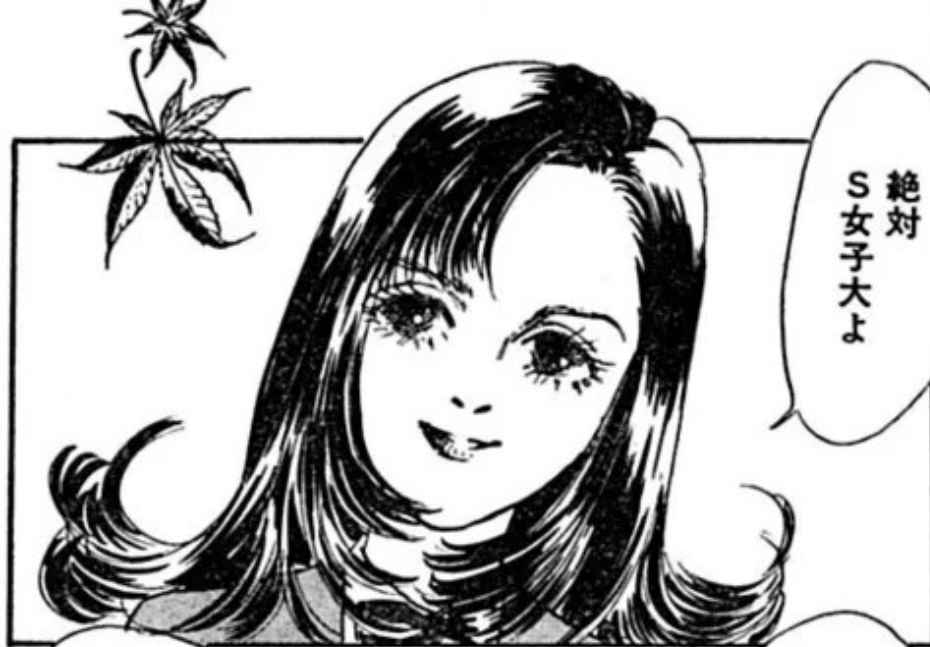
かあ



夕焼けに染まる校舎は
淫らなオレンジに揺れていた



つないだ手から
先生の体温を感じた



絶対
S女子大よ



J大? A大?
何そんなところ受けるの
実華ってば

うん
やっぱ総合大学が
いいなあって思うの



わたしは女子大
学力なんて
どうでもいいのよ
あそこなら
T大と交流あるもの

共学じゃ他校と合コン
しないで
自分とこの男子と
くっついちゃうじゃない

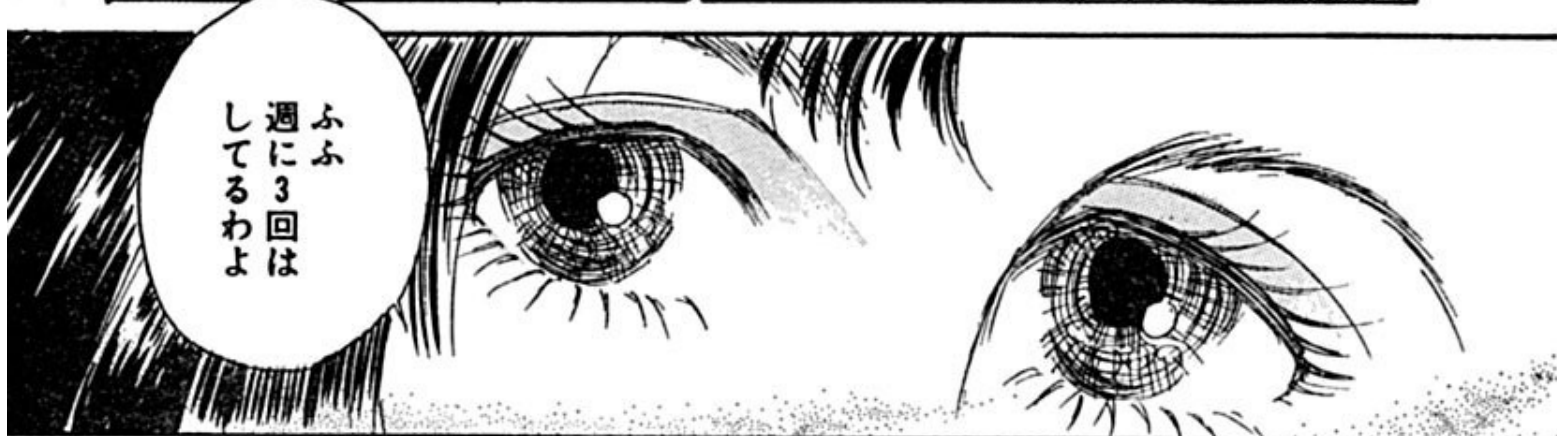
そんなの
まっぴらだわ

やだ
結華
園田先生は
どうするの?





そんな事はないけど...



結華…

放課後

制服を脱いだ
結華は何度も
先生に貫かれていた

狂おしい喘ぎ声が
夕日に包まれて
黒板に染みこむ

あ…

結華はどんどん
淫靡な芳香を放つ
美しい聖女になっていった

ん…

第58回
卒業式

…結華
愛してるよ

卒業したら
堂々とつきあえる

そして
結婚しよう

先生…

ダメよ

結華…?





わたし
実華よ



そんな…

結華からの伝言

「さよなら」って

結華は
もう
会いたくないって



先生

ありがとう

わ・た・し・た・ち・を
可・愛・が・つ・て
く・れ・て



不思議ね
同じ顔でも
全然違う事
考えてる

わたしは
結華みたいに
モテないもの

望まないからよ

「求めよ
さらば与えられん」
てキリストさんも
言ってるじゃない

やーん
伝線
しちゃった

本
ピッ

ガーター
ストッキング
片っぽダメに
なるともう
使えないのよね

もったいないけど
捨てるしかないかあ

ヒューム





あ
結華？
オシ

きよしの約束
なんだけど

やだ 結華ってば
フッキングしてるの
忘れてたのね



あ…
あの

六時には
間に合わないから
七時フル・アール
じゃね

とくと



ツ
ツ
ツ



ちよっと！

やだ
すごい
おっちょこちょい
この人

わたしのこと
結華だと
思ったまま



大丈夫よ
ばれっこないわ

結華のメイク
真似したし
結華の服
バッグ・靴

前も
園田先生だって
気づかなかった

結華！

お待たせ

ごめんよ

バイト
1時間伸びちゃって

好みだ

やはり双子だから
なのだろうか
結華の彼氏は
好みの男が多かった

行こうか
例のホテルのレストラン
とっといたから

え

どこ
泊まるの？

内緒♡
シティホテル♡♡

あの…

どうしたの？

行きたいって
前から言ってたろ
結華のために
バイトしてるような
もんなんだゾ
オレ

あ…
うん…



大丈夫…

鉢合わせることは
限らない

それに

結華は

部屋に泊まって
Hしまくってる
はずだし—


夕焼けの校舎が
脳裏をよぎり

わたしの背中を
ト…ンと
たたいた




うれしい
早く
行きましょう







あれ？
声どうしたの
いつもと違う




風邪？




そ…そう
風邪ひいちゃった
みたい…



なんだ
ムリして
出てこなくても
よかったのに



いけない
結華に
なりきらなく
ちゃ!!



でも…
会いたかった
から



結華…

うれしいよ

結華は
いつも
こんな風に
男の人に扱われて
いるの!?

じゃあ
くっついて歩こうか
そのほうが
寒くない

あ…ん

あ
気をつけろよ
そこ段に
なってる

なんて

いい気分だろう

男の人に優しくされるのって

とひけるような気持ち

共学で
友達以上のつきあいを
したことがない
わたしには

このお姫様扱いは
ドキドキした

ご予約いただいています
吉沢さまですね
どうぞ

吉沢さんていうのね
このJKT

やつと
名前が
わかった

結華って
高校のときも
モテたんだろうな

えっ？

そんなこと…

そごよ

結華は
いつも
男の人に抱かれてる

あのときも

ふふ…

モテない女が彼女じゃ
つまらないでしょ

わたしは結華

言って
くれるじゃない

部屋—
とってあるよ

わたしはどんどん
結華になつていった

うれしい

ん…ん



あ…
す…
食べられてる
みたいなキス

あ…
舌を…

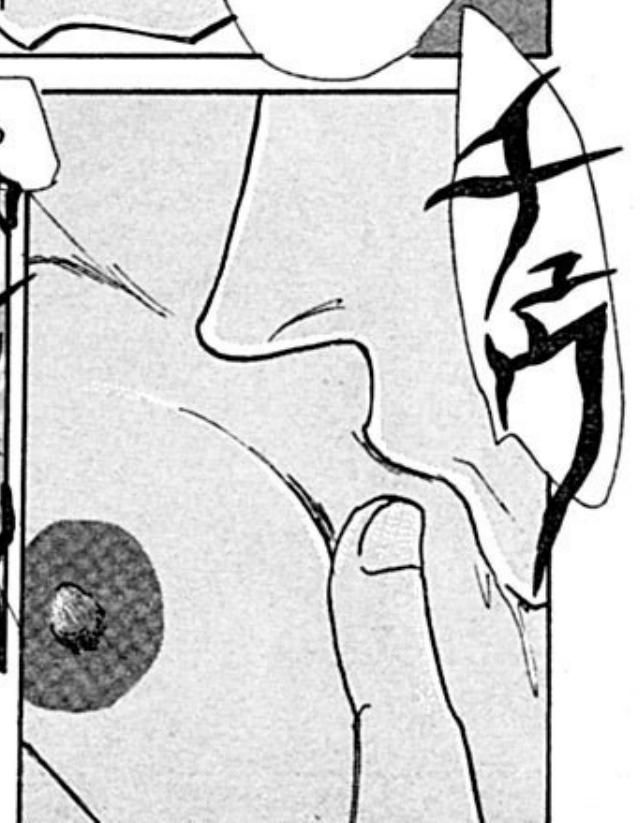
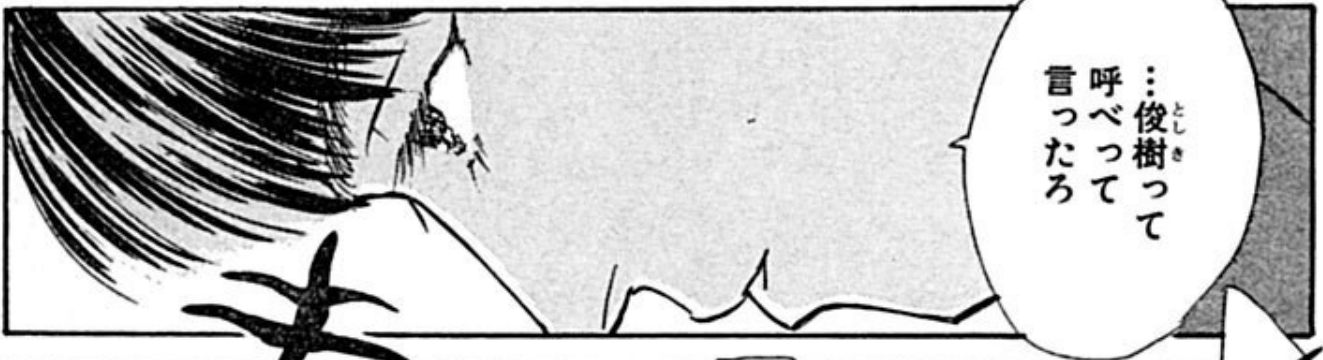
舌

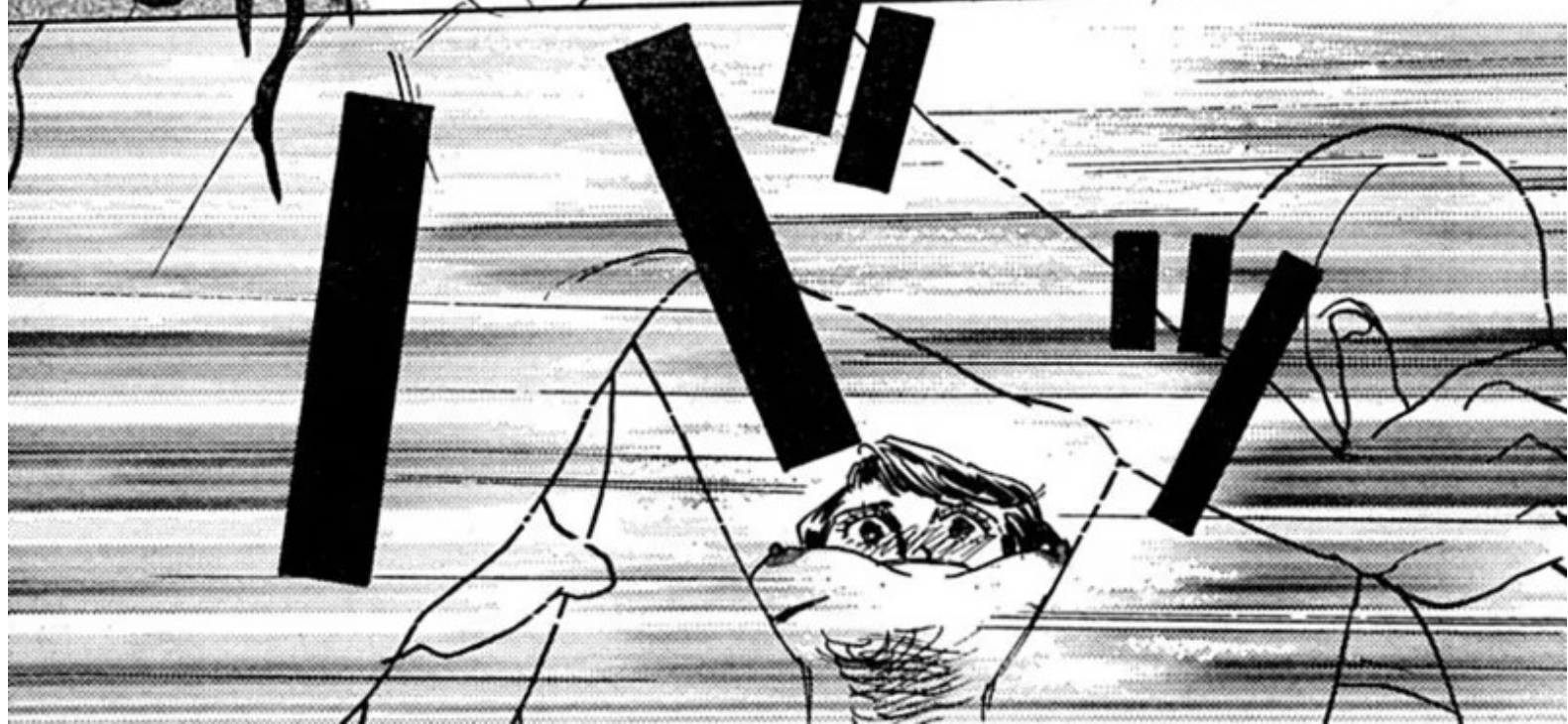
あのととき夕焼けの
校舎で見た
結華の痴態を
見出ししていた

今は
わたしが
あの結華なのだ

あ…
ん…







きょうは
たっぷり
キスしてやるよ

ここ

結華の
大好きなとこに

え

や…

聴かしい

ああっ

結華つてば
いつも
こんなこと…

ビク
ビク
ガーン



ああつ
頭が
切れそう...

おいしいよ
結華

ああつ

オレの注射で
風邪なんか
ふきとばしてやるよ



こわれる

どうしたの?
体調悪いのか...

あ...
あの

いけない
バレちゃう

そうよ
わたしは結華

制服で教師を
何回もくわえこんだ

性少女

わたしは結華

ああ…

もっと

もっと

揺らして

必死で男の
背中にしがみついて

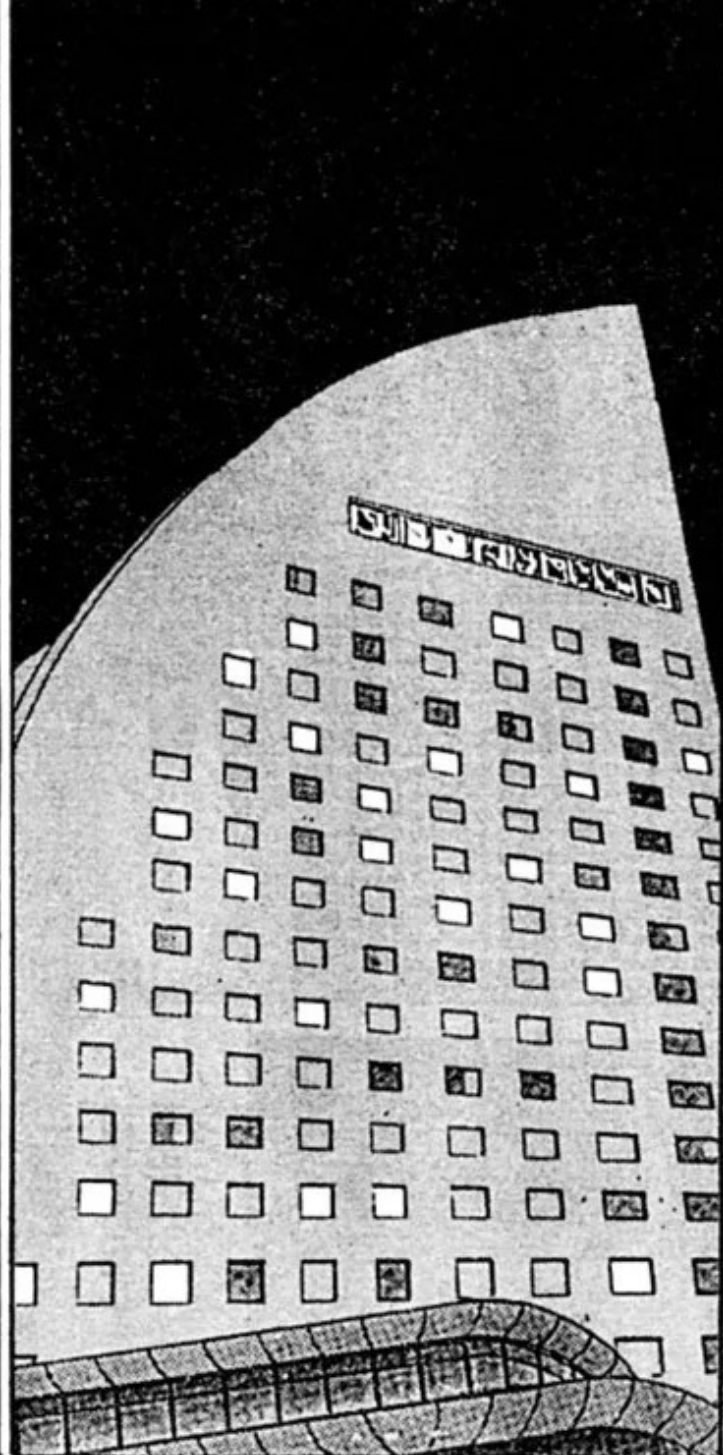
喘ぎ声をあげる

自分が結華なのか

実華なのか

もうわからない





翌日
結華は寝不足の
目をして帰宅

ただいま

迎えるわたしも
目の下にクマを
つくっていた

おかえり

どうしたの
疲れた
かおして





はい

吉沢です

と
キ

.....



キ
ト

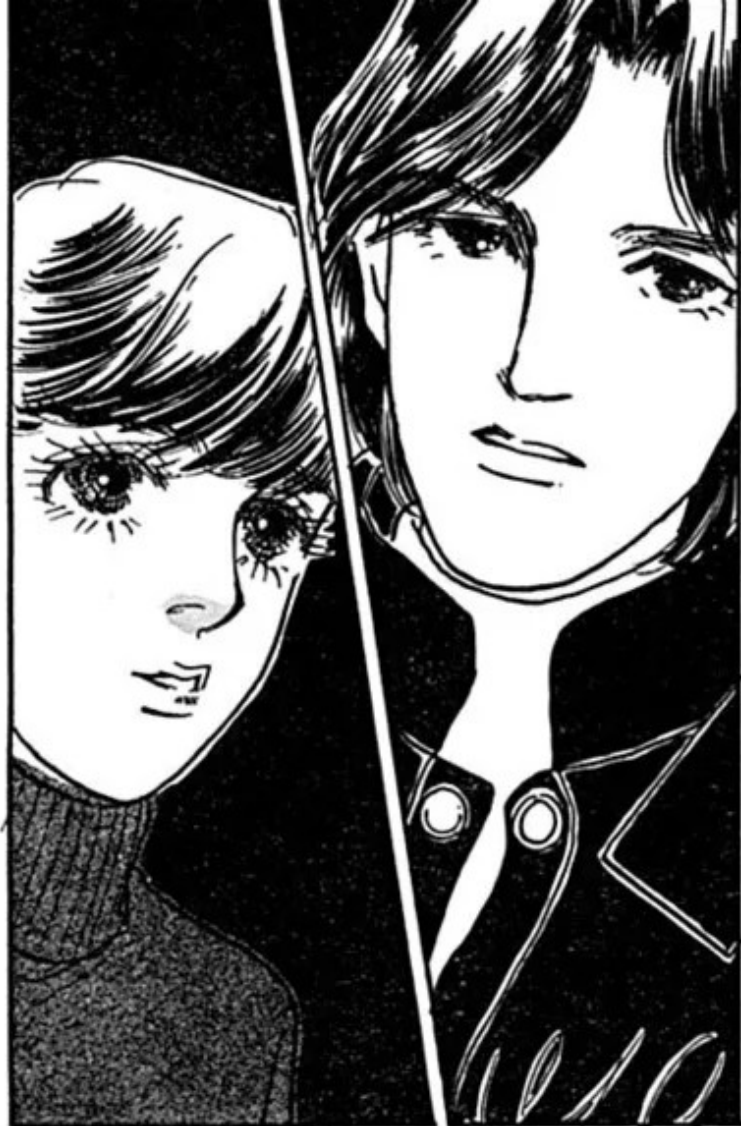


どうしよう
バシたんた

あ...あの

きみは
実華おとこ

出て来て
くれないかな
きみに
会いにきたんだ



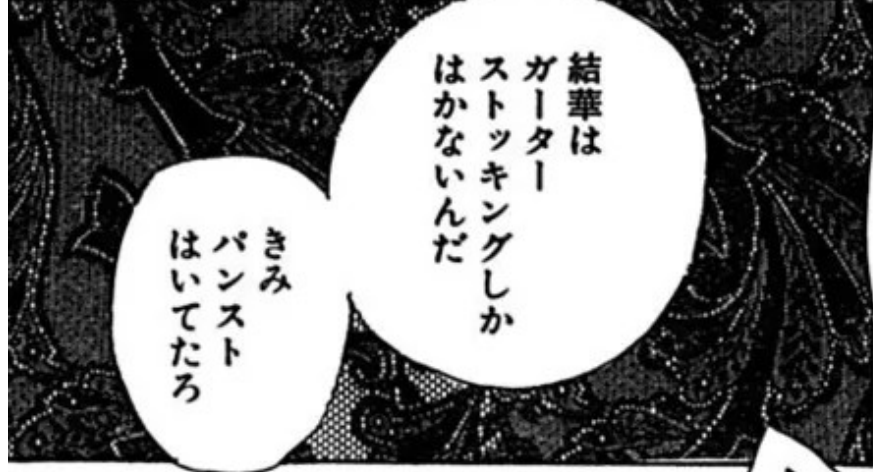


いつも
結華から
きいてたんだ
おくての双子
実華って

まさか
あんな風に会うとは
思っていなかったよ

結華は
ギター
ストッキングしか
はかないんだ

きみ
パンスト
はいてたろ



しまった!!



ごめん

気づいた時には

もう

してしまってたから...

...



わたし…

待って

ただ
謝りに
来たんじゃない

頼みに来たんだ

改めて
会って欲しくて

結華として
ではなくて

実華として

ほんと
つきあって
くれないか…





シンデレラの
忘れ物は
破れた
ストッキング



少女から女へ

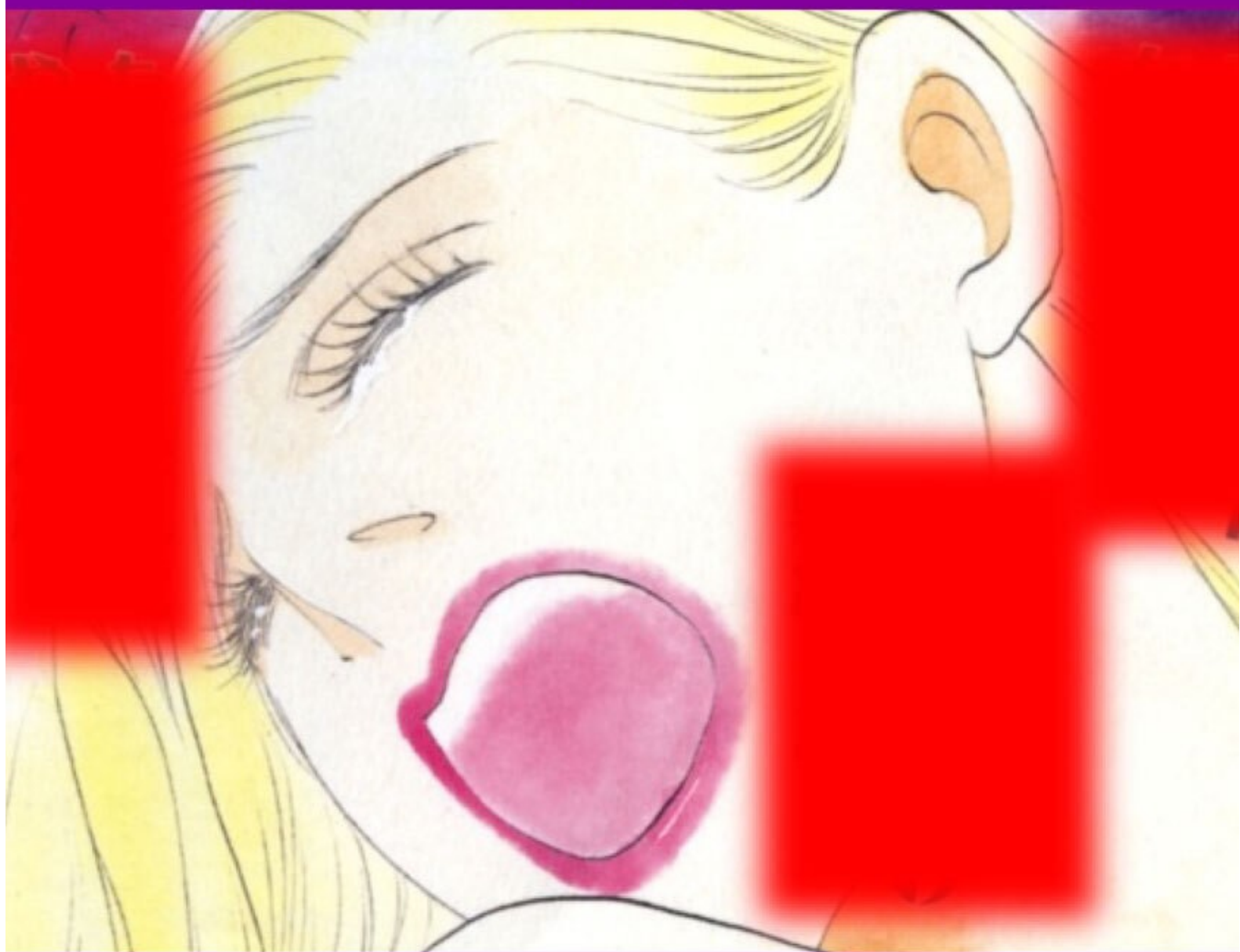
生まれ変わった日から

もう

白い靴は似合わない

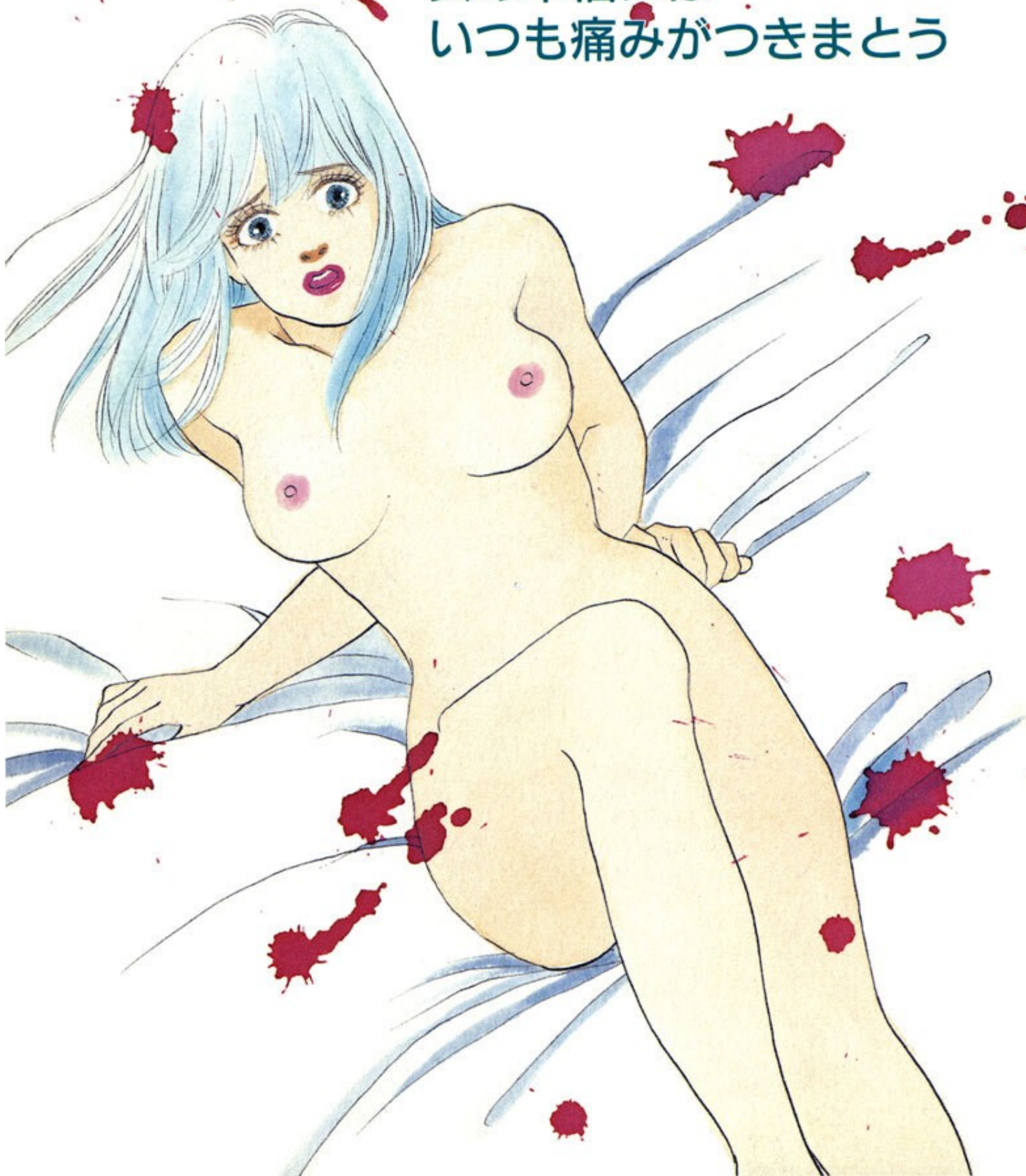
◇END

最初の男 同時に塞がれる 上下の唇



鳳 青良 OHTORI SEIRA

女の幸福には
いつも痛みがつきまとう





痛い……!

すぐ
気持ち
よくなるよ

大丈夫

あ…ああ

やだ
すこい

お腹の中に
彼が入ってるの!?

それは
初めて味わう
感覚

動くよ

まりな
麻里奈

身体の奥深くまで
うごめく異物が
侵入する—

ひっ

ごめん

でも
きつと
このほうが
気持ちいいから

あ

ゆっくり
ゆっくり
揺れるゆい
動き始めるよ

あっ

あ

痛みが
だんだん
快感に
転じていく
こと…

—破瓜—
はか

や…

どうして

勇哉さん
ゆうや

あ…あ
気持ちいい

オレもだ
麻里奈



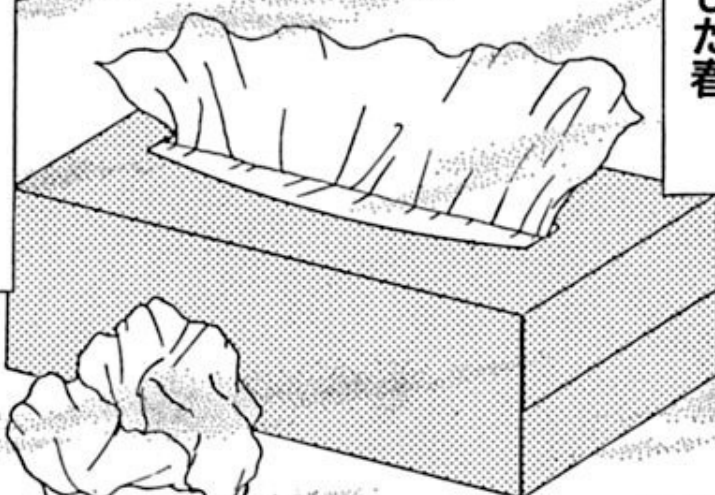


頭が溶けちゃう

いやあ

高校を
卒業した春

バウン
処女からも
卒業した





うちむら
内村勇哉は
バイト先で
知り合った
ひとり暮らしの
大学生

知り合って
3ヶ月
キスから先は
あつという間



初めて
だったのか



麻里奈

好きだよ



やだ…
恥ずかしい

どうして
かわいいよ

カーマツ



それから
会う度
セックスした

両親に
バイトの時間を
ごまかして
いつも
彼の部屋に
寄った



いいよ
麻里奈

ずいぶん
上手になった

彼に
悦んでほしくて
何でも教わった



初めての男に
のめり込むって
こういうこと
なんだろう

明けても
暮れても
彼が欲しくて



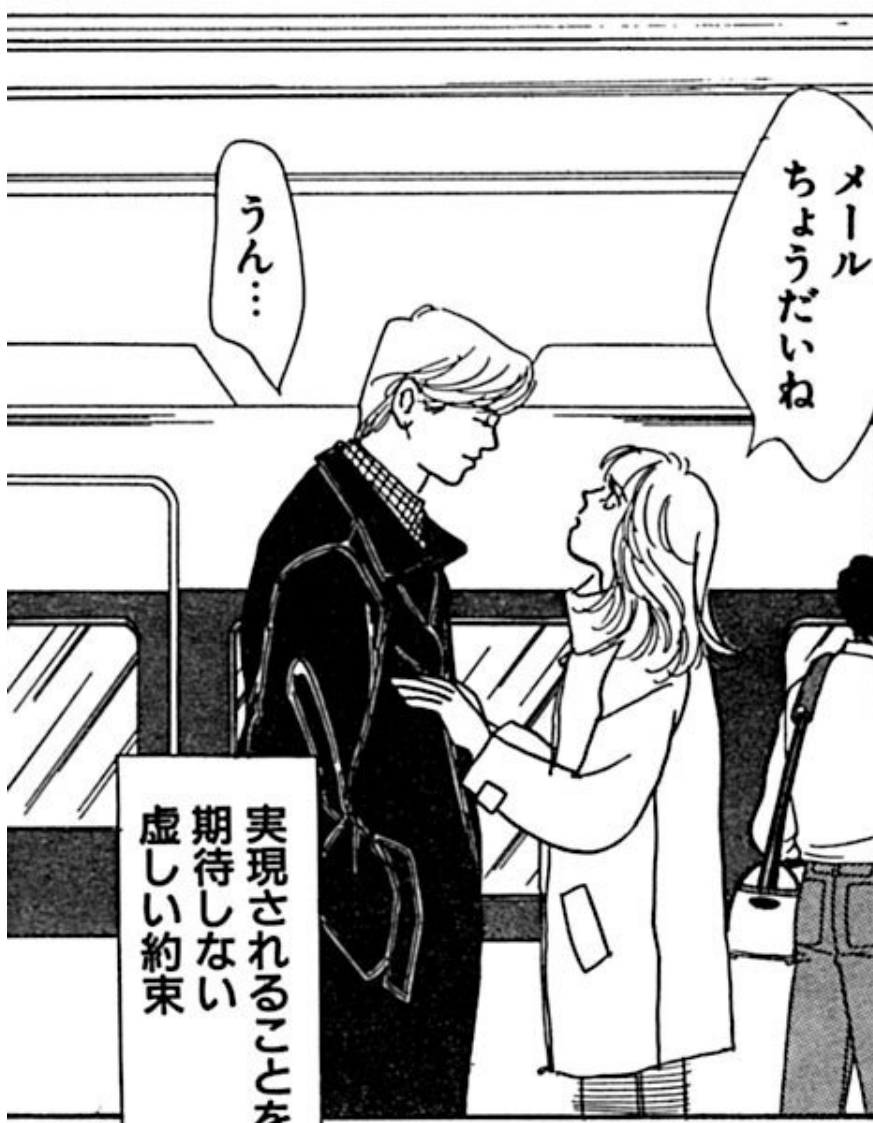
ん…ん



まるで
勇哉のペニスに
支配されているかのようだ

—が

Uターン
就職？



うん…

メール
ちょうだいね

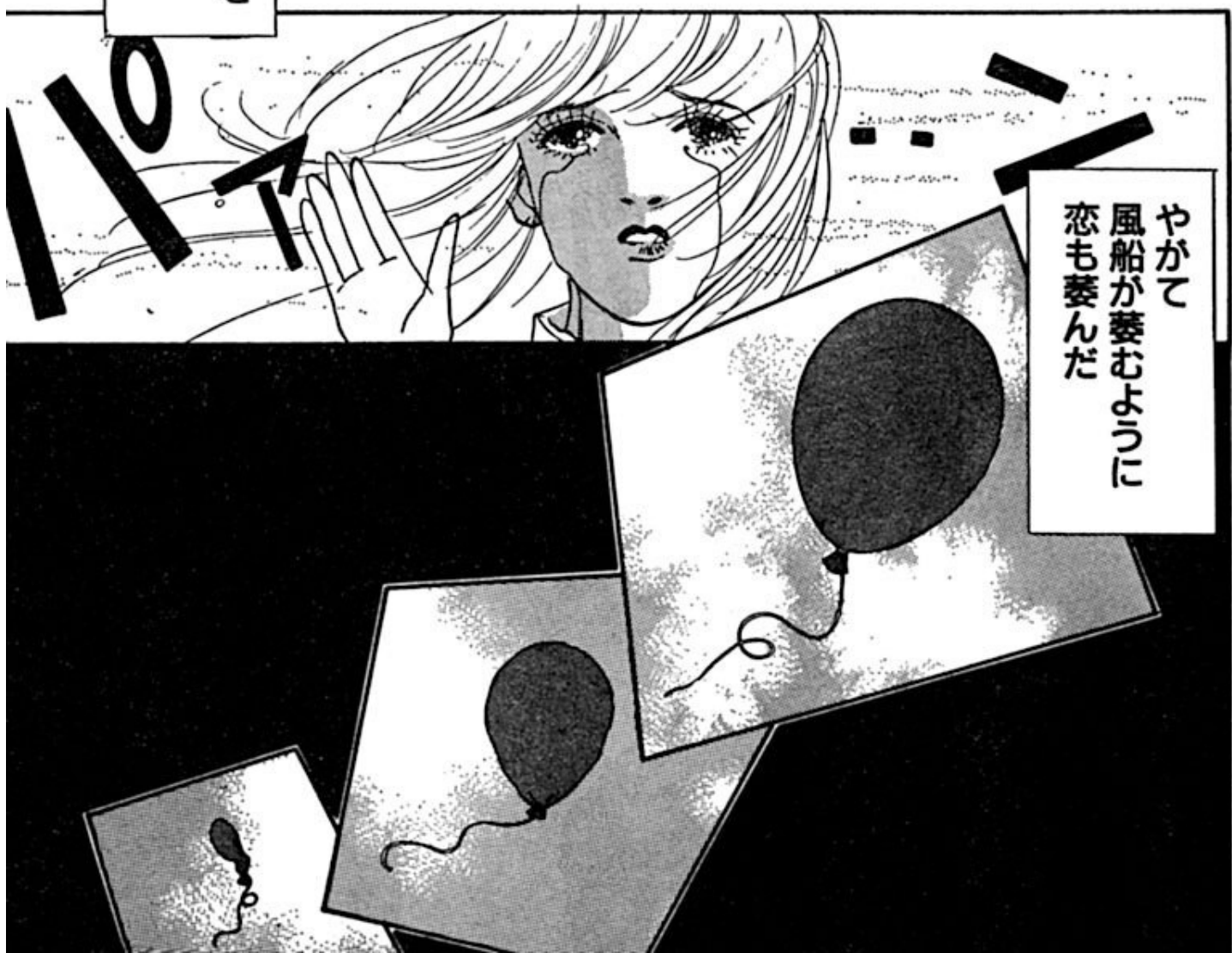
実現されることを
期待しない
虚しい約束



うん

東京には
コネもないし

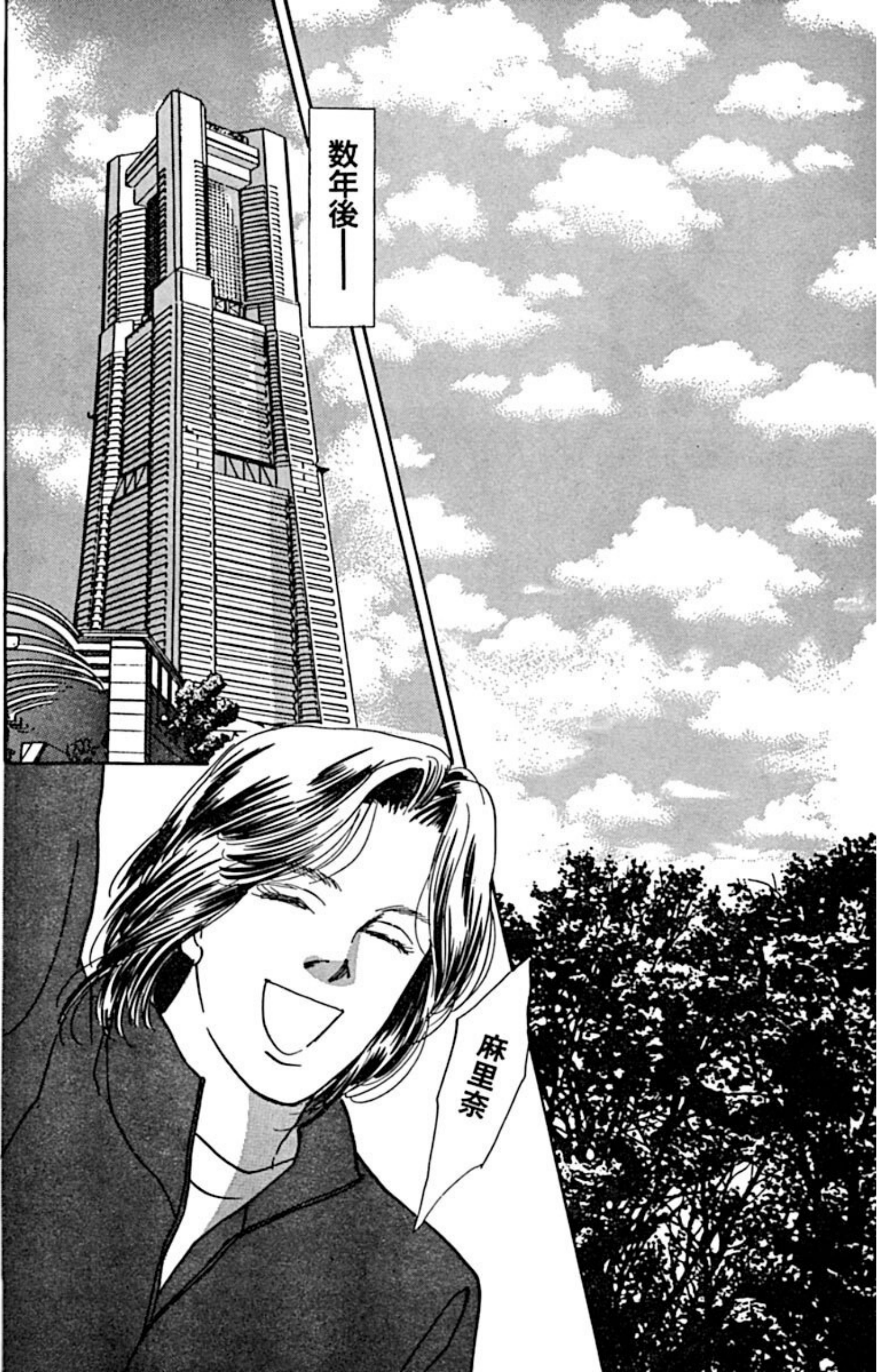
向こうで
親がクチきいて
くれる会社
あるから



やがて
風船が萎むように
恋も萎んだ

数年後——

麻里奈





ううん
さつき
来たところ



待った？



スポーツクラブで
知り合った
きのしたまさみち
木下政道さんとは
そろそろ半年



はい
はい



あー
ハラ減った

いつも
そうね
まさみち
政道さん

早く
メシ
食おー



ああ…



もう濡れてる

麻里奈は
デリケートだね



初めての時から
ドロドロだった

あ…

や…
政…

ああ

そう

もう
わたしは使用済み

このセックスに
最初から
痛みなど
なかった

ああ

もっと
突いて
もっと

奥まで!



合体しながら
舌を吸うと

敏感に反応して
膣がキュッと
ひきしまる



く…
麻里奈

キツイ…



お腹の奥を
下から
突き上げて!!

内臓を
揺らして!!

もっつ

もっつ—!!



あの快感を――

痛みから序々に
揺らいでゆく
陶酔感を――

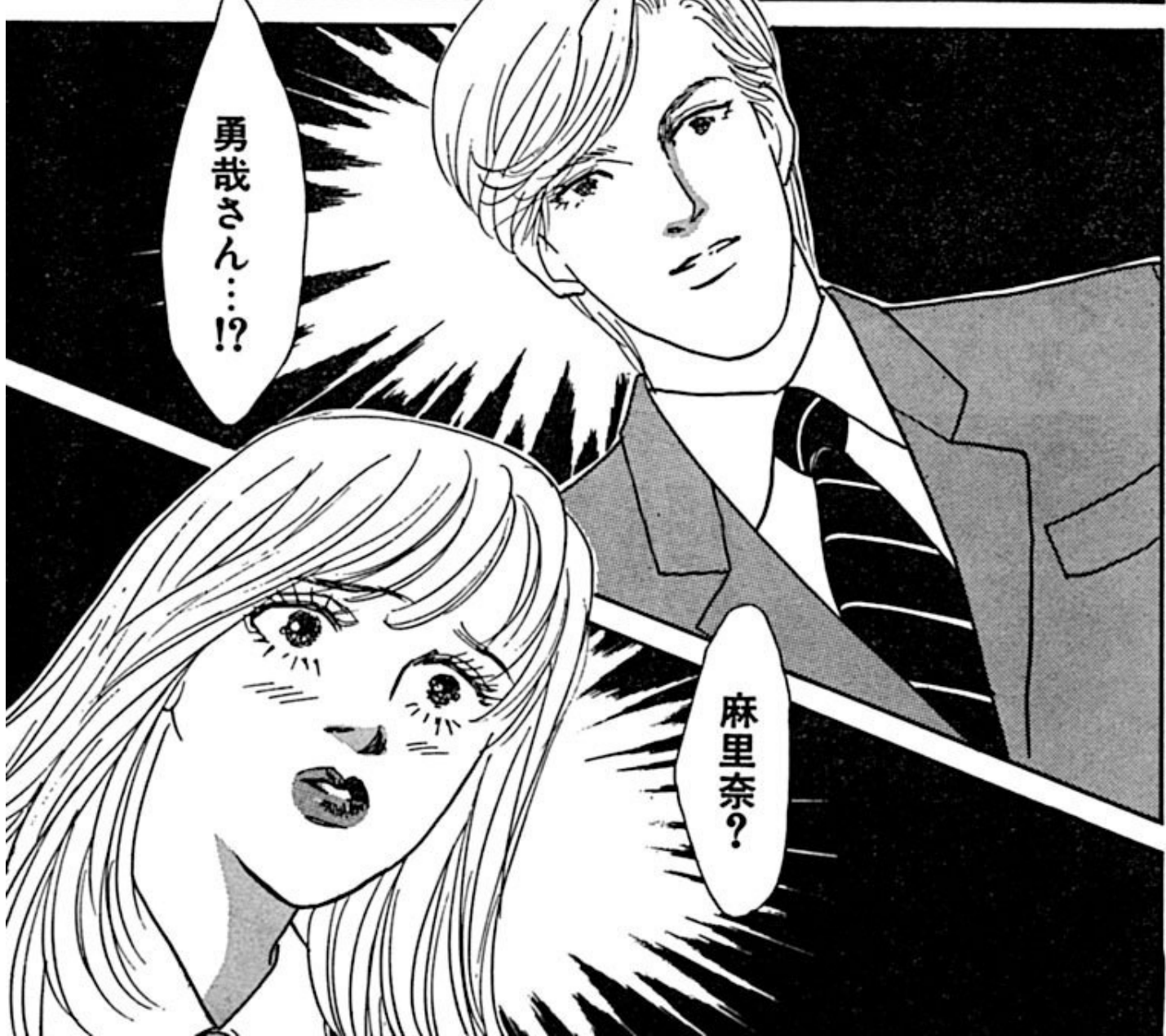
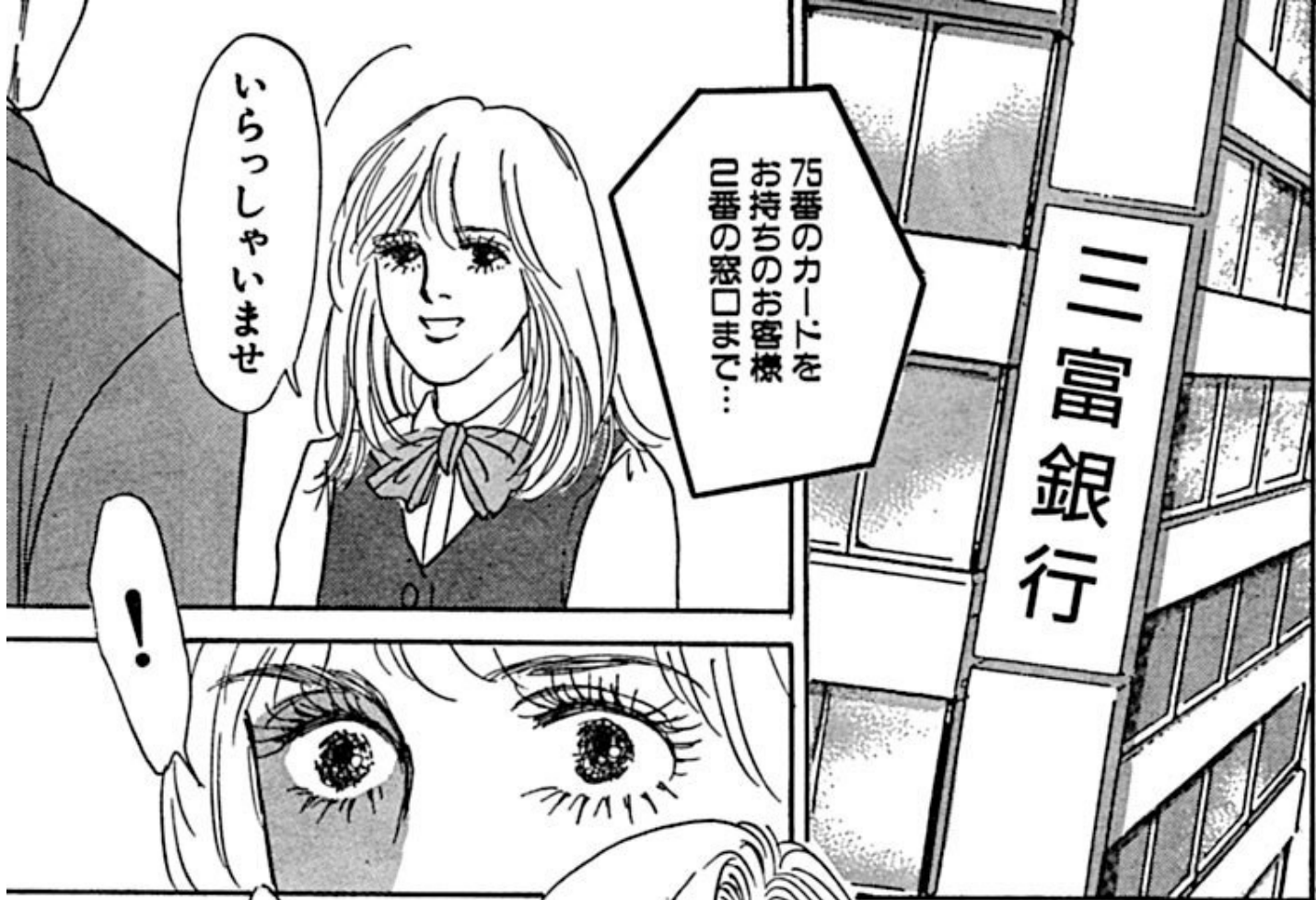
また味わいたい

どうしてかしら？

政道^{かれ}は
一生懸命
愛してくれる

なのに――

わたしは政道さんの
ペニスに支配
されてない





キレイに
なった



驚いたな
麻里奈
銀行員に
なったのか

会社から
ここに口座
つくるように
言われて…

転勤で
今月から
こっちへ来たんだ



やだ…

ポ



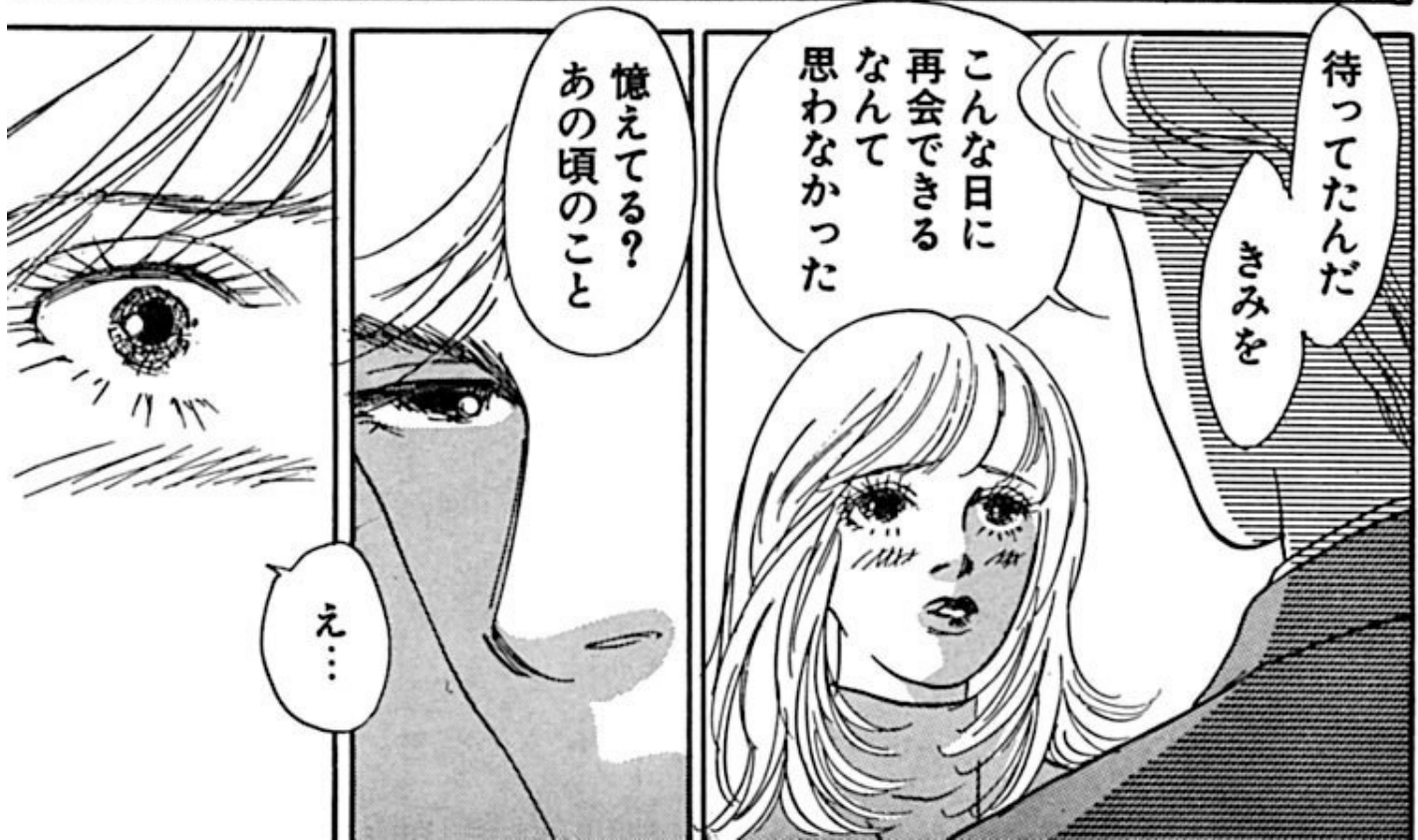
スカートの中が
湿っていく



これが
初めての男の
魔力なの？



勇哉さん





自分がまだ
青い果実
だった頃を
知っている男の
誉め言葉に
心が揺れる

や...

やめて

そんな
言い方

身体の
内側から
湿っていく



だっ
だめよ
わたし
今...

彼氏が
いるのか

そうだよな
おまえ
いい女になった



いけない
わたしには
政道さんが
!!



行こうか

ふたりきりに
なれる所へ

グアイ

思い出を
語りたい

ああ

どうして
逆らえないの

理性では語れない
何かが
私を支配する——





いい女になった
麻里奈

あれから
男を
何人
くわえこんだ?

すっかり
熟れた
女の
体型だ



すぐ
反応するな

乳首が
吸いついて
くる

ん…

違う

あなたが
こうしたのよ

くっ

そうだった

オレが
"最初の男"
だったな

あ…

たっぷり
仕込んで
やったんだよな

麻里奈に
セックス
教えた男って

ものすごく
エッチだったんだな

政道さん
ゴメン

わたし
感じてしまっ

この男の^{ヒト}声

指

唇

わたしの内側を抉^{えぐ}った
あの感覚が

また わたしを支配する



浴^ゆびさ^びゃ^ん——
!!

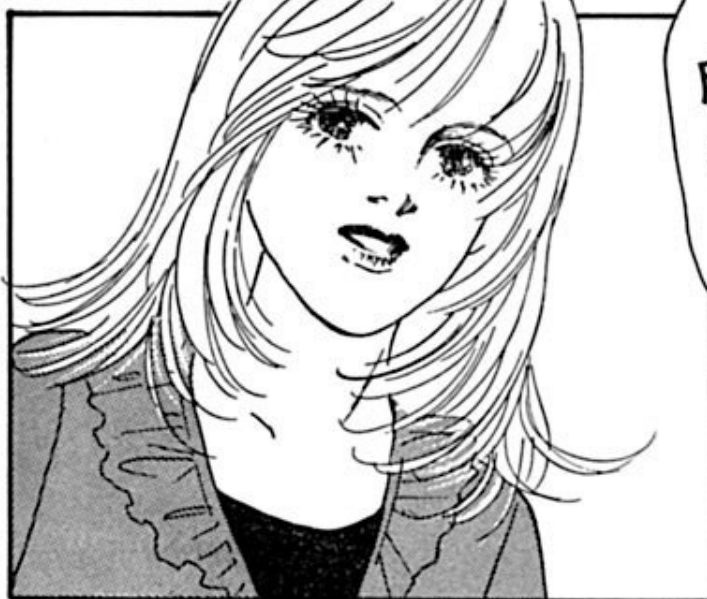
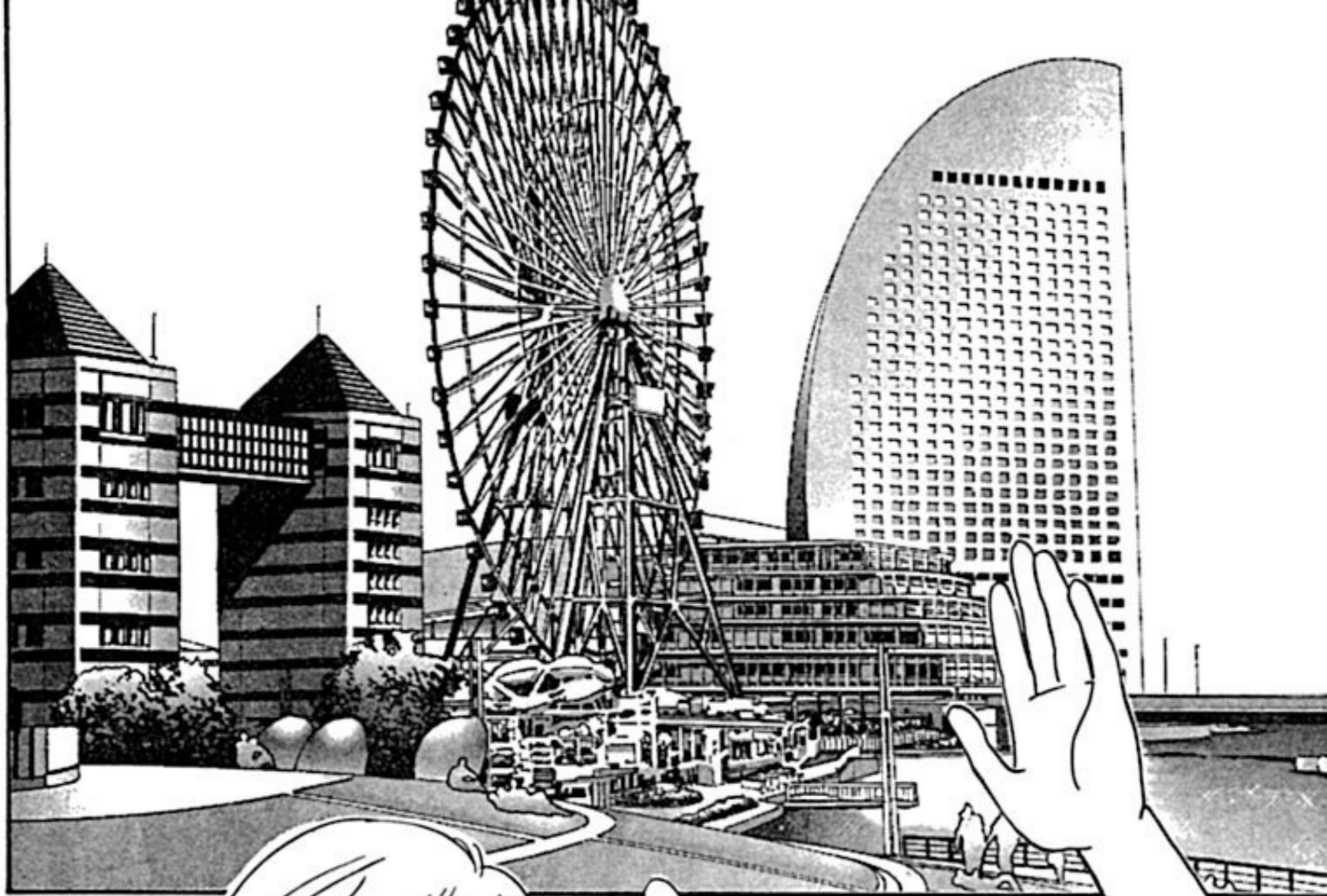
ケータイの番号を
書き込んだ名刺を
残して
支配者は去った

内村 勇哉

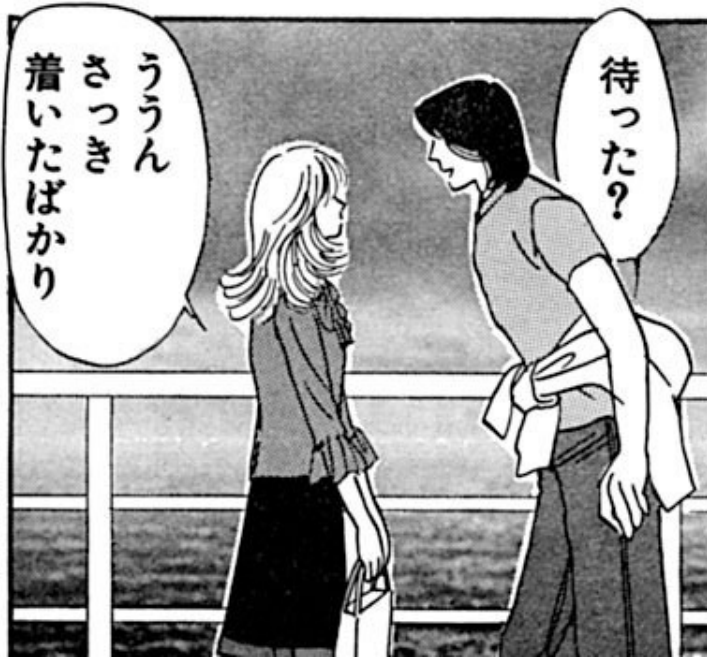
どろろ

不貞の痛みが
心に襲いかかる

政道さん
わたし――

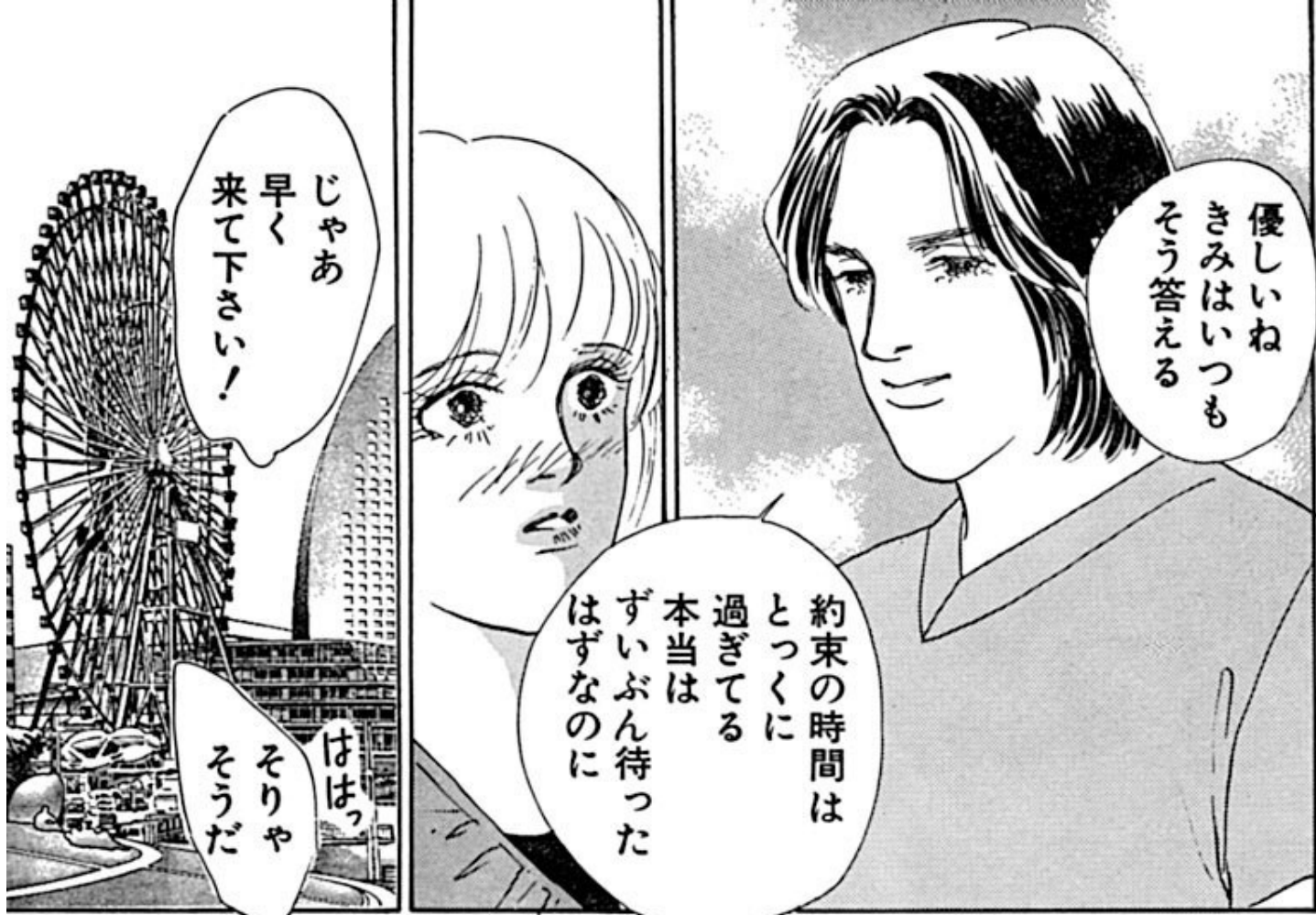


麻里奈!



ううん
さっき
着いたばかり

待った?
?



優しいね
きみはいつも
そう答える

約束の時間は
とつくに
過ぎてる
本当は
ずいぶん待った
はずなのに

じゃあ
早く
来て下さい!

ははっ
そりゃ
そうだ



行こうか

トッ



あなたの顔が
まともに
見れない

ごめん
政道さん

優しいんじゃない
後ろめたいの

トッ

はじめから
あなたを通して
勇哉のことを
感じようとしてた

だから
あなたに対して
いつも
少し引け目があった

その上

こないだ
ついに



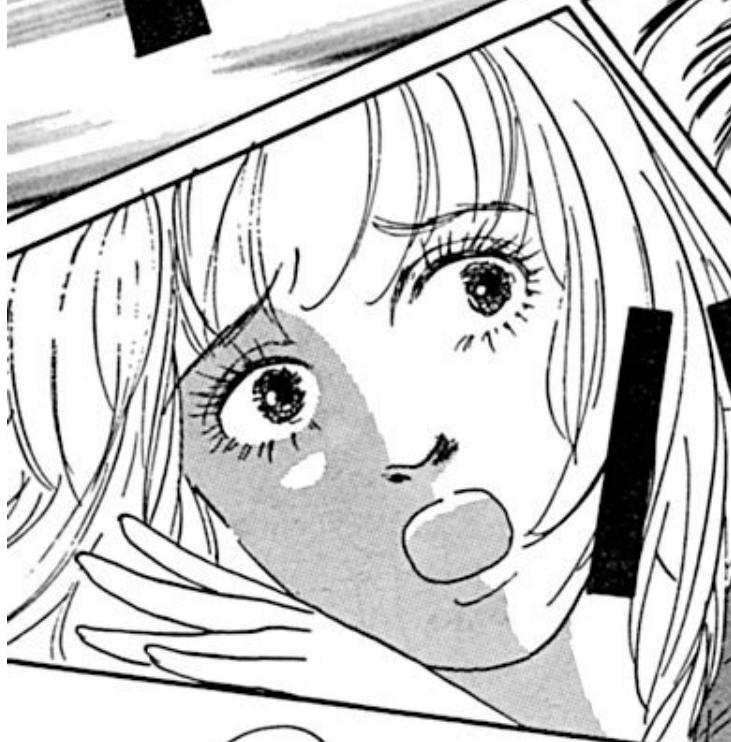
どうしたの？
麻里奈
気分悪いの？

政道^{かれ}の優しい
まなざしが
針のように
心に刺さる

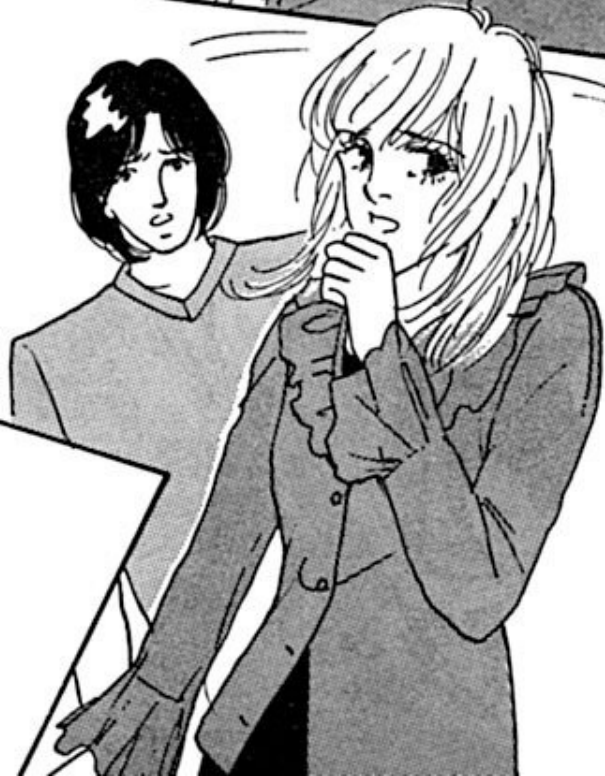
熱でも
あるのかな？



触らないで



また
連絡する



ごっ
ごめんなさい
わたし
今日は帰る







しばらくは
政道とも
勇哉とも
会うのが怖くて

ひとりの夜を
過ごした

三富銀行

仕事に埋没して
痛みから
解放されたかった



小林さん
電話よ

木下さんから

え…

政道さん!



麻里奈

きみが
求めこいるものを
ほくなりた
考えてみた

おしと
おみを満足
わねいしとが
くおぬし思ひ

今夜
いしおの所へ
待てぬ



政道さん
わたし…

きみが
来るおし
おしと
待てぬ

アッ



心が…痛い……





ごめんなさい

きみのほうが
遅れてくるのは
初めてだね



お礼なんて…

わたしは
自分の心の痛みから
解放されたくて
来ただけ



ありがとう
来てくれて





き
や

きみがいつも
支配されたがって
いるのは
わかっていたよ





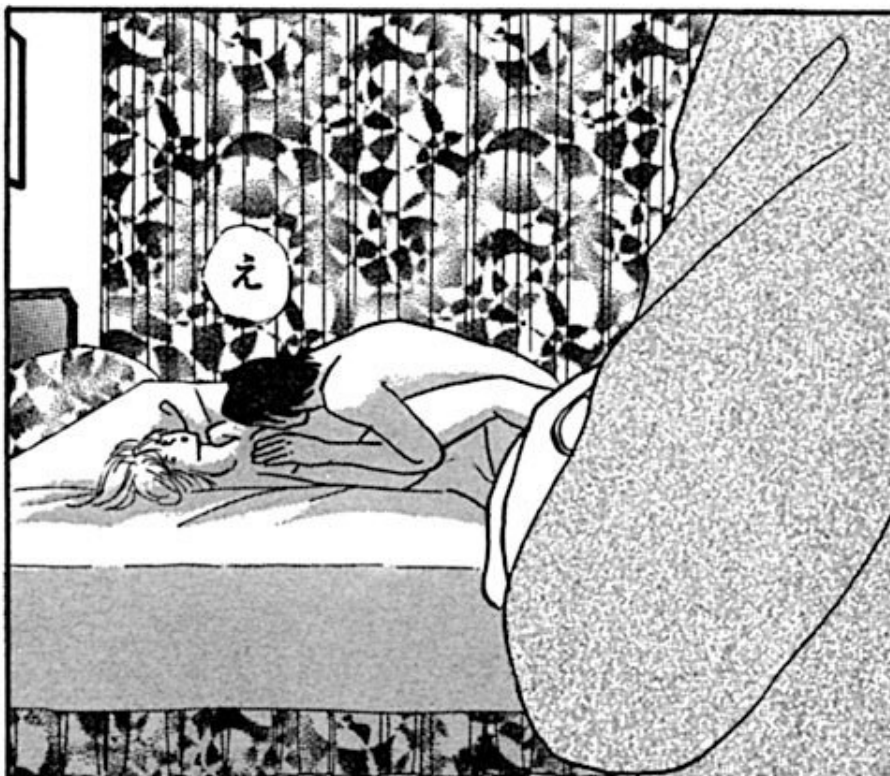
そして
それが
オレの力では
どうにもならない
ものだって
ことも!

あ...



痛い...
政道さん

胸...
ちぎれちやう



え

痛いのが
好きなんたら

勇哉さん
.....!?

オレが呼んだんだ

政道さんが
.....!?



ジュ



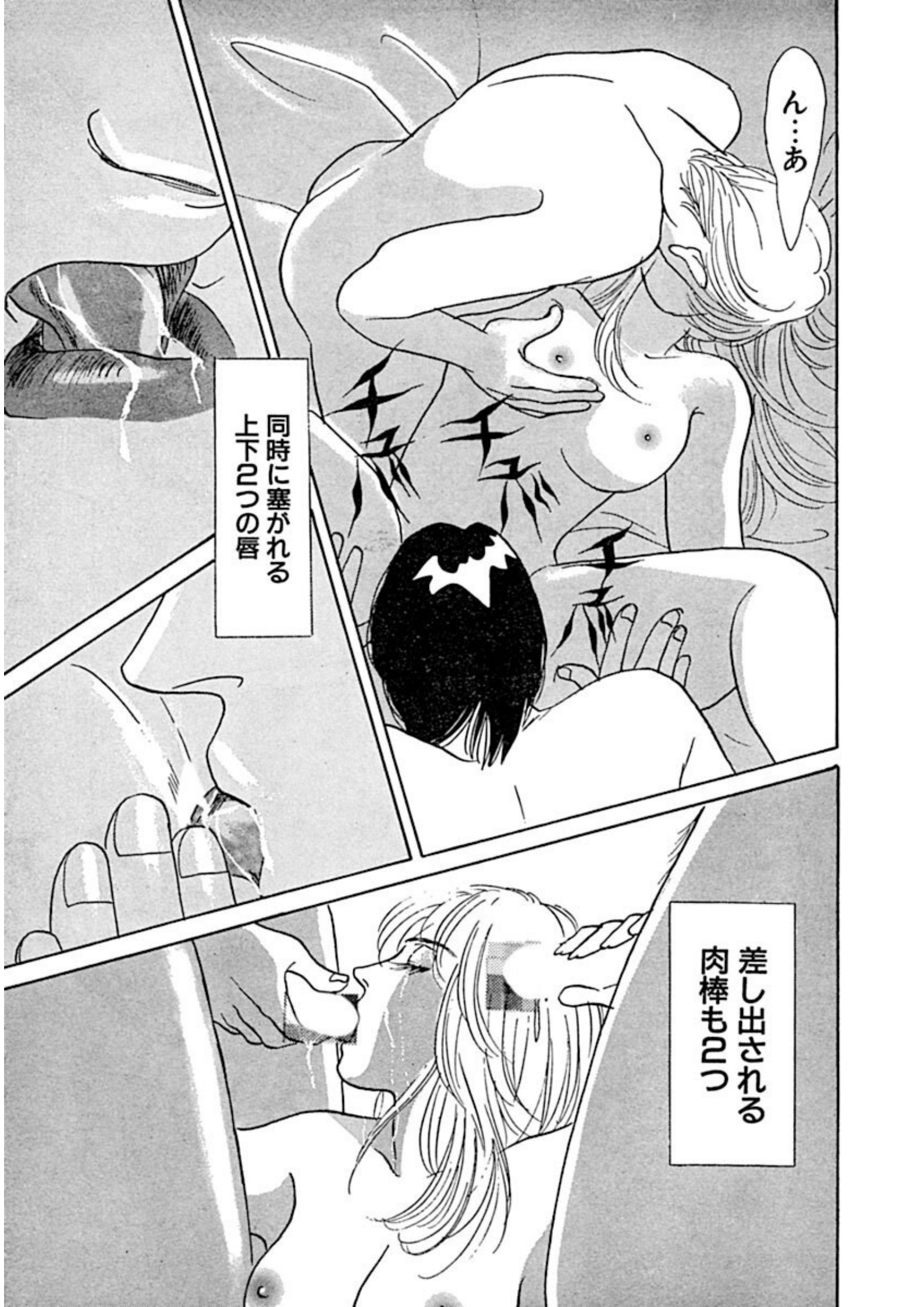
きみを支配してる
「破瓜の痛み」を
越えるためには
彼に協力して
もらうしかない
と思ったんだ



ひ

こんなこと
わたし…！

戸惑うわたしに
おかまいなしに
2人の男は
支配を始める



ん…あ

同時に塞がれる
上下二つの唇

差し出される
肉棒も二つ

後ろから
滑り込んだ
熱い異物が
内臓をつつく

ひっ

ああ
すごい
大きくなってる

さあ
麻里奈

きみは
これを

政道さん

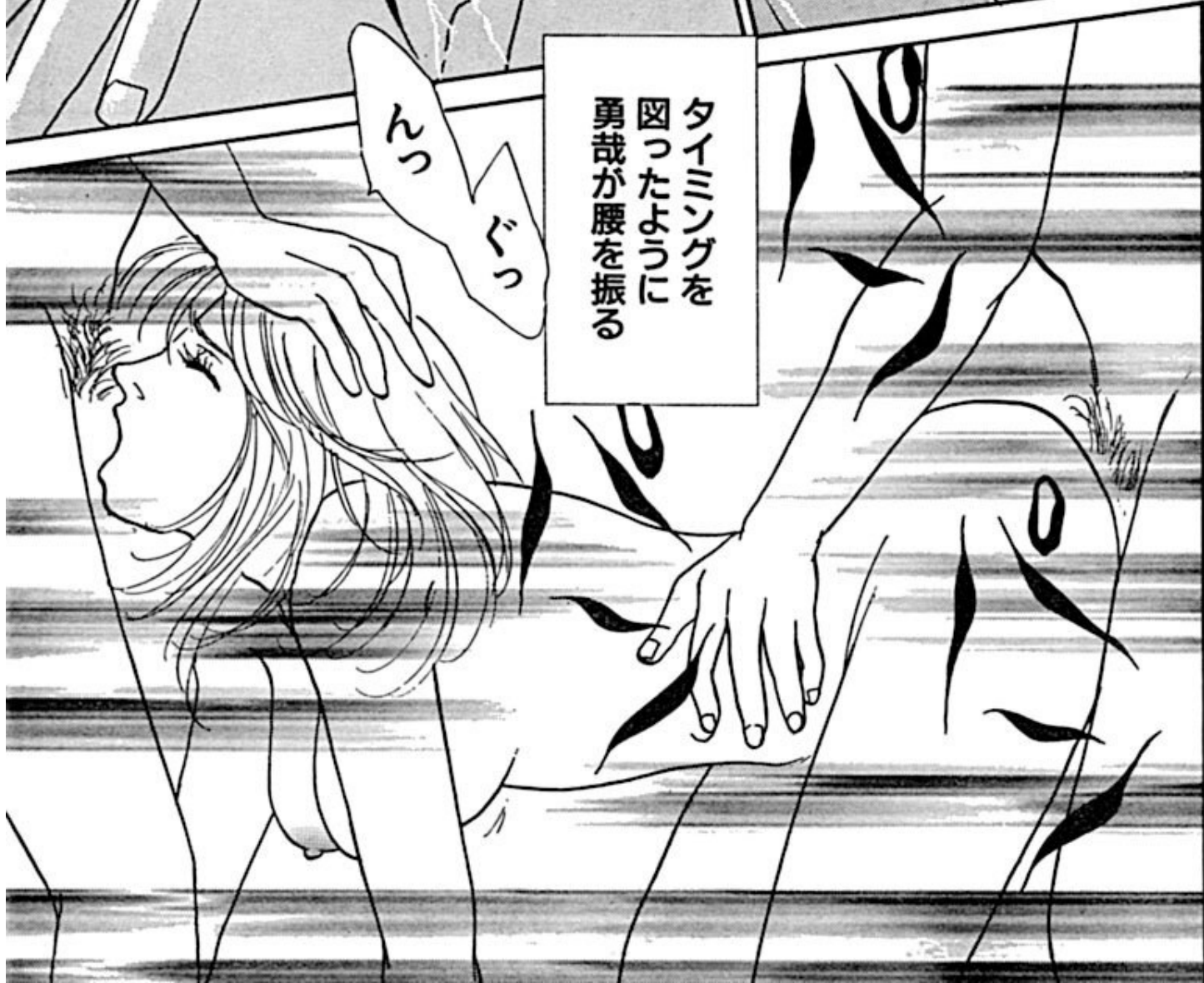
じゃあ
入っているのは
勇哉…？



さあ
初めての時を
思い出して

きみのアソコ
最初の男のを
ずっぽり
くわえこんでる

ダラダラ
涙流してさ



んっ
ぐっ

タイミングを
図ったように
勇哉が腰を振る

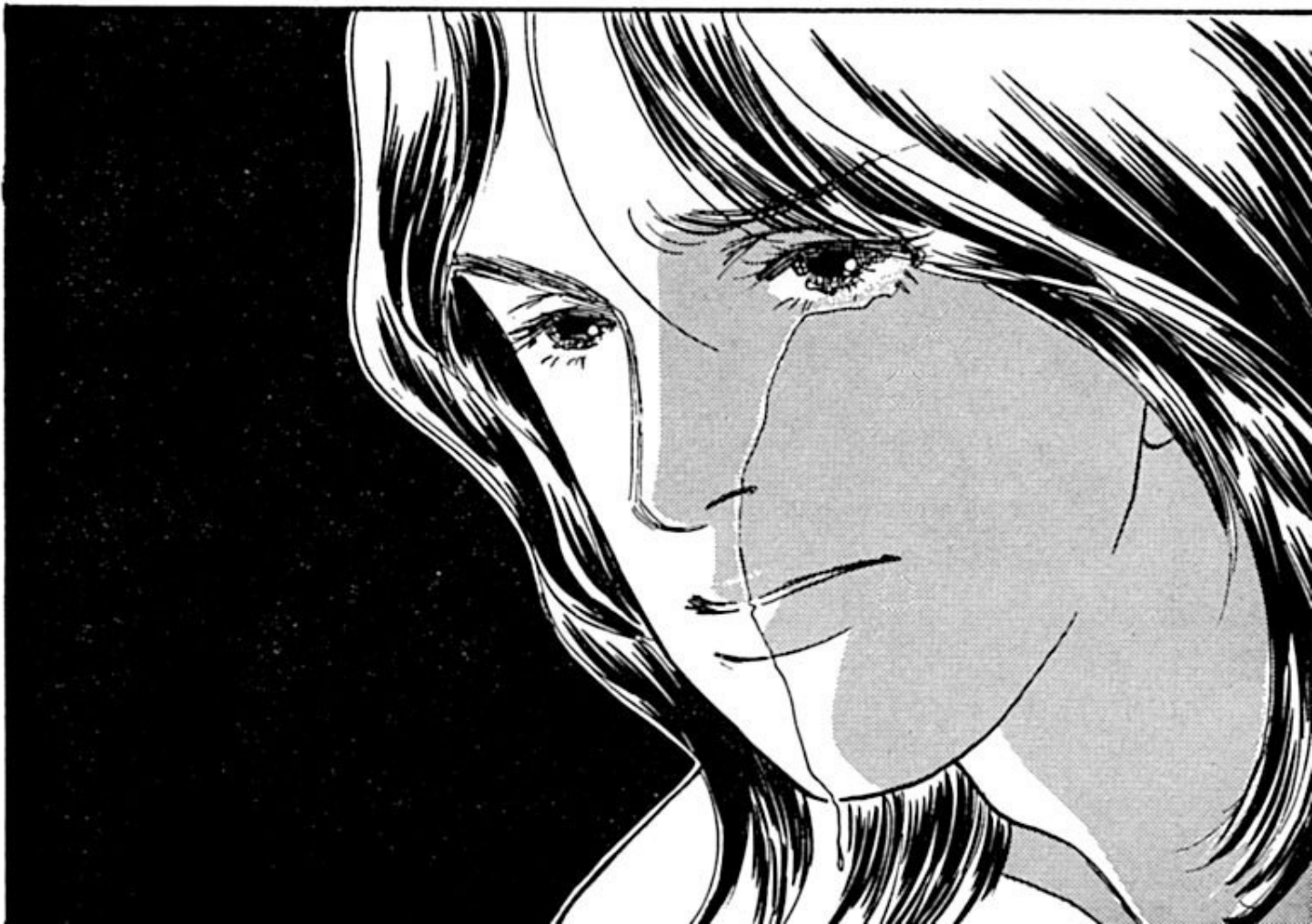


麻里奈!

そんなに
うれしそうに
腰を振るんだ

どろじと

ひゅっひゅっ





麻里奈?



その涙に
政道^{かれ}の心の
痛みを見た



ちょうだい



わたしの
ここに

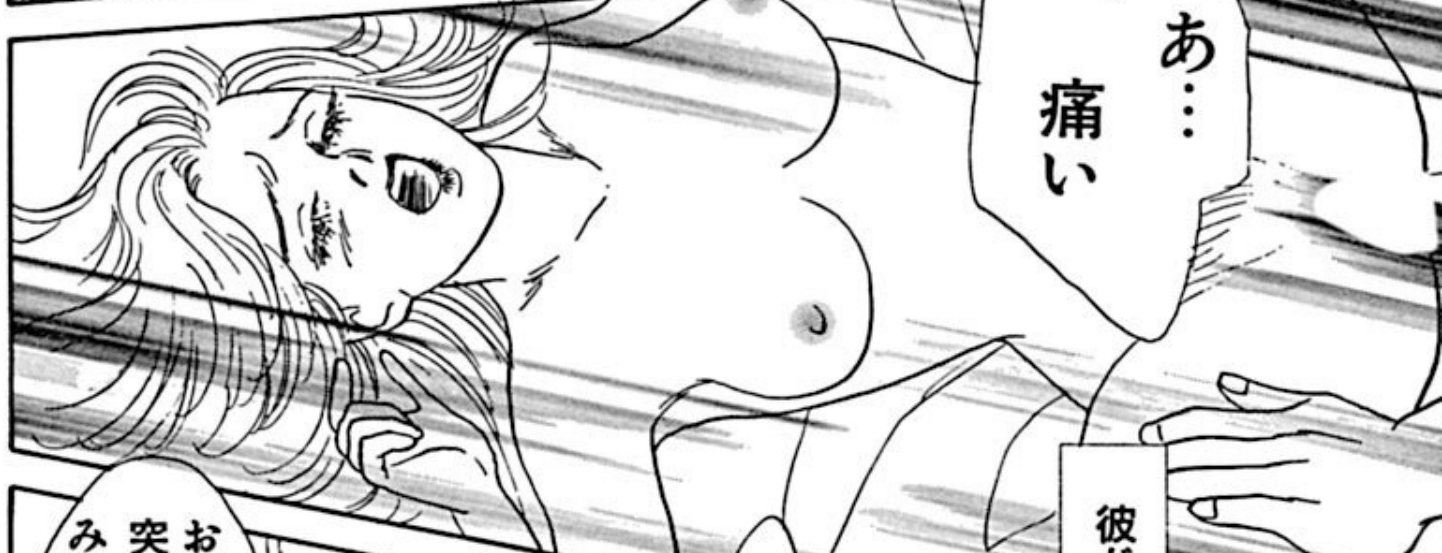


政道さん
今度は
あなたの

ちょうだい



麻里奈...



あ...
痛い



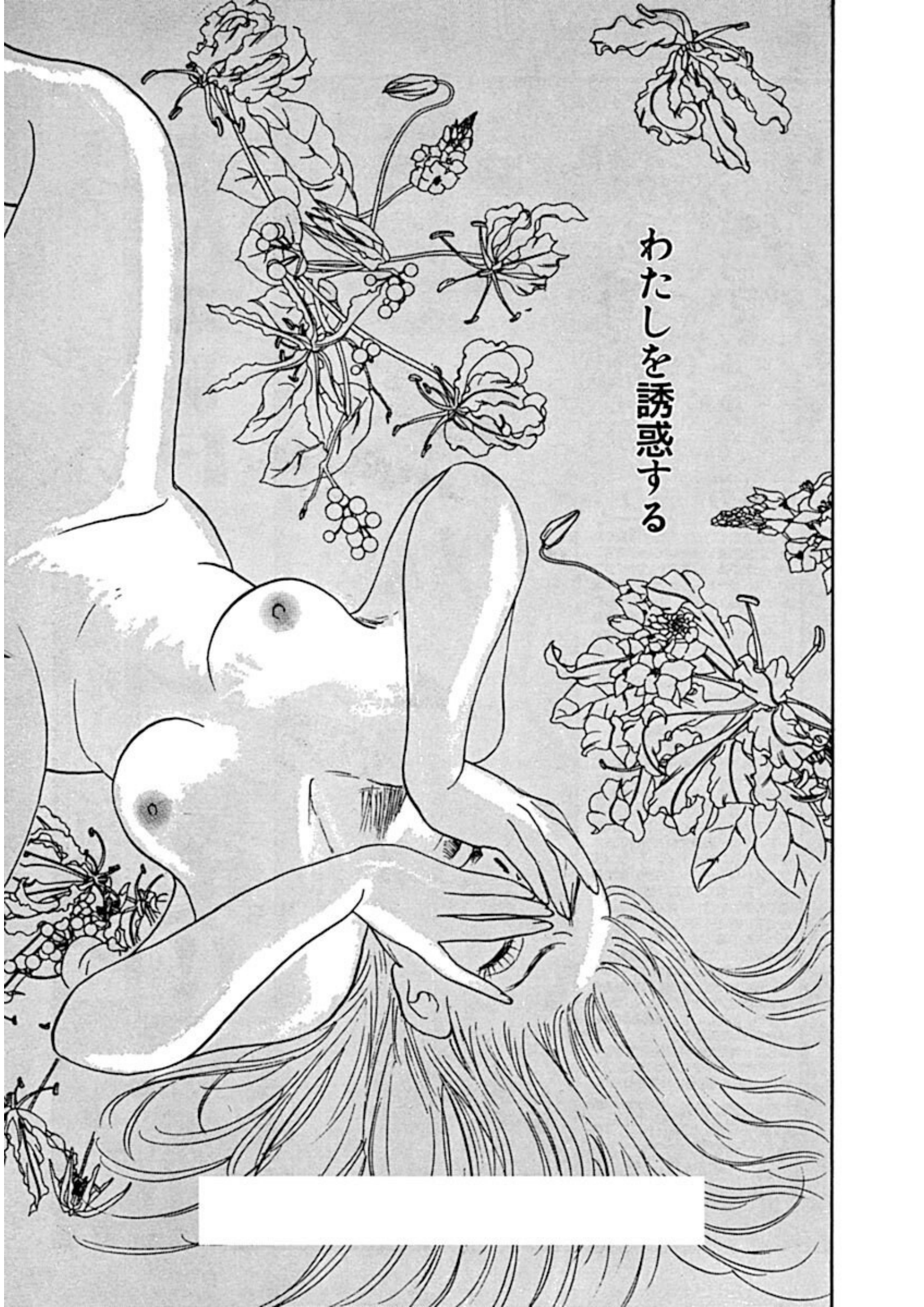
お腹の中に
突っ込まれた
みたい

感じる

彼が伝えた痛み——

く...
“破瓜”の痛みとは違う
甘い痛みが

わたしを誘惑する



END